

韓国の高等学校日本語教科書における日本像に関する研究

飯 田 史 也

(第四部教育科)

(平成3年9月10日受理)

はじめに

ある国の児童・生徒が、学校教育のなかで一つの外国についての知識やイメージを習得するのは、おもに地理や歴史の授業の中であるが、語学の授業における外国理解も重要である。語学教材における対象国理解には①一般市民の日常生活レベルでの会話場面が設定されるため、学習者と等身大の、生きた外国人の姿が見えてくる②短篇の小説や詩歌等の文学作品が採用される場合には、その国民の情感や美意識を理解することができる③一般に多くの語学教材では、その国の諺や伝統的な笑い話等が單元化されるが、その中にもこまれる生活上の智恵は、国家をこえて万国に共通なものが多い。このため自国の共通する諺や笑い話と比較することで、その国民をより身近に感じることができるといった特色があるからである。

各国の学校教科書の中に描かれている日本像は、その国の若者がイメージする最も平均的な日本像であるといえよう。教科書はその影響力においても、発行部数においてもきわめて強力な情報メディアだからである。またその国の政府が自国の学校生徒に、どのような日本観を持たせようとしているのかを教科書から知ることでもある。

日本では、現在の韓国の高等学校の課程で「日本語」が教えられていること自体あまり知られていない。¹⁾そして多くの日本人は、韓国の「日本語」教科の存在を知って驚く。日本人の中に「韓国社会は日本人や日本語に対して、必ずしもよいイメージを持っていないであろう。だから韓国の高等学校では、日本語は教えられてはいないだろう。」という漠然とした先入観があるからである。したがってその教科書の中に、日本や日本人がどのように描かれているのかということを知ることも少ない。韓国の教科書をひもとき、そこに描かれた日本像・日本人像を知ることは、現在の日本人には若干の勇気を要することかもしれない。

本稿では、今回入手した韓国の高等学校日本語教科書を検証し、これらの教科書の中で日本や日

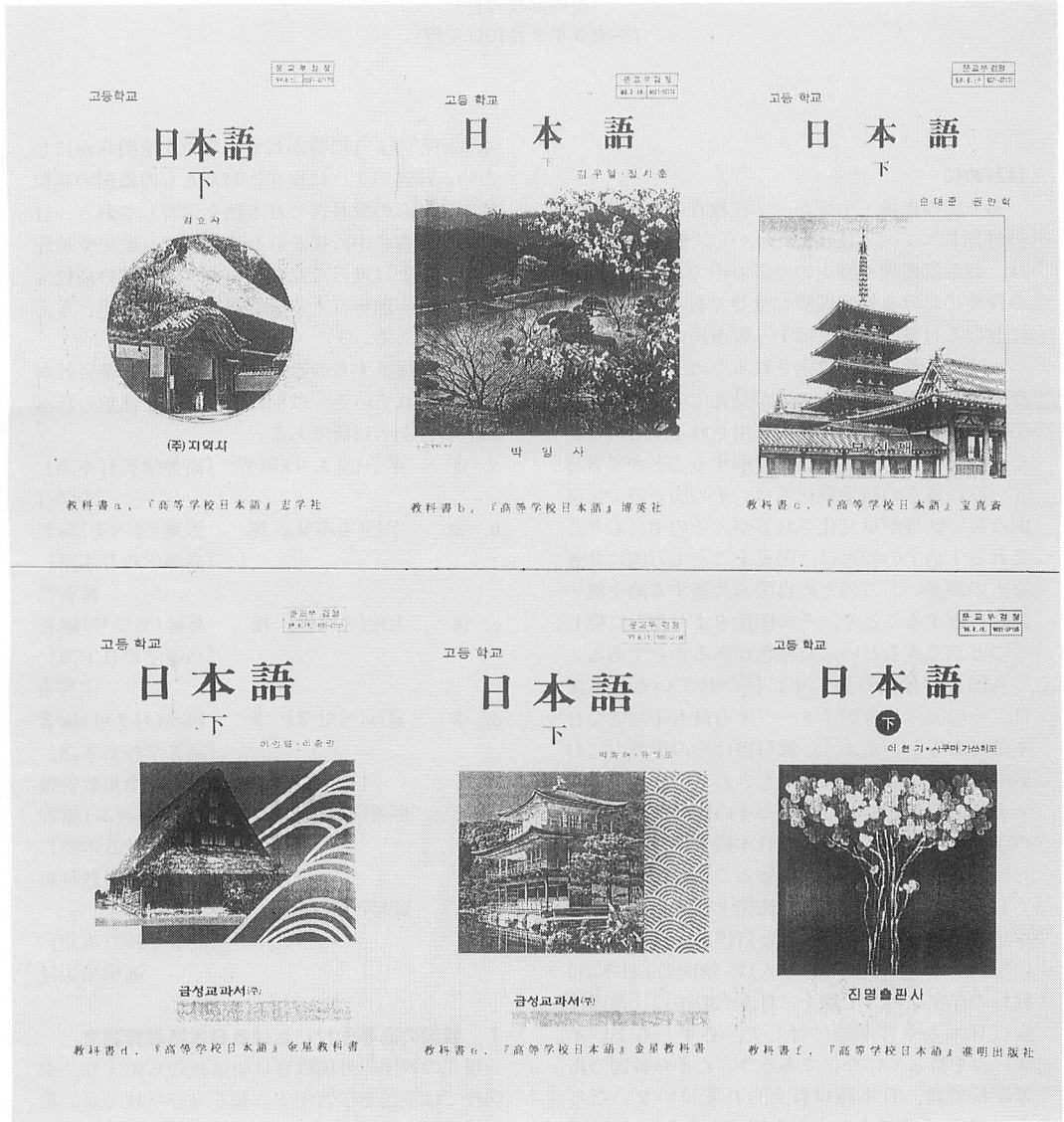
本人がどのように描かれているのかを明らかにしたい。後述のように現在約94万人もの韓国の高校生がこれらの教科書で日本語を学習しており、日本語教科書の中に描かれた日本像は、歴史や地理の教科書とは違った意味において、韓国の高校生たちの日本理解に大きな影響力を持つものと考えられるからである。

本稿で検証するのは、現在5つの教科書会社から出版されている、以下にあげる全6種類の日本語教科書上下12冊である。

- a. 金 孝子(김효자) 編著 『高等学校日本語』
志学社
- b. 金 宇烈(김우열), 鄭 致薫(정치훈) 編著 『高等学校日本語』
博英社
- c. 孫 大俊(손대준), 權 萬赫(권만혁) 編著 『高等学校日本語』
宝晋齋
- d. 李 寅泳(이인영), 李 鐘萬(이종만) 編著 『高等学校日本語』
金星教科書
- e. 朴 熙泰(박희태), 柳 濟權(유제도) 編著 『高等学校日本語』
金星教科書
- f. 李 賢起(이현기), 佐久間勝彦 編著 『高等学校日本語』
進明出版社

1. 韓国の高等学校における日本語教育制度

現在の韓国の外国教育は中学校から始まり、中学校では英語を学習する。続く高等学校では、第一外国語の英語のほか、第二外国語教科課程としてドイツ語、中国語、フランス語、スペイン語、日本語が教授されている。第二外国語は必須選択科目の一つであり、第二外国語を履修する高等学校生徒は5外国語のうち一つを選択する。現在、人文系高等学校で英語20単位、第二外国語10単位が、実業系高等学校で英語16単位、第二外国語6単位が指定されている。²⁾またこれらの外国語の代



〈写真1〉 各社日本語教科書の表紙

わりに家事科などの教科を選択する場合もあるが、韓国の多くの大学が、第二外国語を入学試験科目として指定しているという事情もあり、現在、多数の生徒がいずれかの第二外国語を習得している。なお韓国の現職高等学校教諭たちによれば、5つの外国語のうちどれを開講するか、また3年間の高等学校課程のうち、どの段階で第二外国語を教授するかというのは、各高等学校の裁量に任されている。

第二次世界大戦終決後の韓国の教育制度は、教授要目期以前(1945. 9～1946. 10)、教授要目期(1946. 11～1954. 3)、第1次教育課程期(1954. 4～1963. 2)、第2次教育課程期(1963. 2～1973. 1)、第3次教育課程期(1973. 2～1981. 11)、第4次教育課程期(1981. 12～1987. 12)、第5次教育課程期(1988. 1～)という7期に分類される。教授要目期以前には、4年制中学校で英語が教えられていたが、学校制度が6—6—4制に変わった教授要目期からは、高級中学(高等学校)でドイツ語またはフランス語が教えられた。これ以降、第1次教育課程期には、第二外国語としてドイツ語と中国語が教授され、第2次教育課程期からはフランス語(1963)とスペイン語(1970)が組み入れられた。日本語は第3次教育課程期の1973年2月、文教部令第310号によって教授されることになった。³⁾

1988年の調査によると、各第二外国語の履修生徒数は、人文系高校でドイツ語(639,849名:42.2%)、日本語(460,110名:30.3%)、フランス語(386,131名:25.5%)、中国語(17,175名:1.1%)、スペイン語(13,907名:0.9%)となっており、また実業系高校では日本語(483,818名:79.5%)、中国語(78,844名:13.0%)、ドイツ語(24,474名:4.0%)、フランス語(20,022名:3.3%)、スペイン語(1,457名:0.2%)となっている。⁴⁾日本語学習生徒数は、人文系高校ではドイツ語に次いで2番目に多く、また実業系高校では2位以下を大きく引き離している。さらに人文系・実業系を総合すると、日本語(943,928名:44.4%)、ドイツ語(664,323名:31.3%)、フランス語(406,153名:19.1%)、中国語(96,019名:4.5%)、スペイン語(15,364名:0.7%)となり、日本語履修者数が最も多くなる。

韓国では、高等学校第2種(認定)教科書の執筆指針は、5年ごとに改められ、この指針に基づいて教科書が執筆される。各教科書は文教部の検定に合格後、各高等学校で採用される。

現在の第二外国語教科書の執筆指針は、第5次

教科書課程文教部告示第88—7号(1988年3月)に次のように示されている。⁵⁾

- ①言語機能を総合的に習得し得る内容にし、初期段階には「聞く・話す」に重点を置きながら、「読む・書く」という能力を養うようにする。
- ②言語機能のバランスの取れた運用能力を養うため、会話、読解、作文、語彙、文法などの項目を総合的に指導できるものにする。
- ③該当外国語常用の国民と日常生活、文化、思考などを理解し、国際的な理解と見識を高める内容にする。

1991年9月現在使用されている日本語教科書は、1989年に文教部の教科書検定を受けたものであり、同年8月19日付け検定印を受けた新教科書が、1991年度の新学期より各高等学校で使用されている。

II. 日本文化・風俗に関する写真

いずれの日本語教科書においても、最初の数ページがカラーグラビアになっており、日本の伝統的建造物、日本の風俗や伝統行事、東京の都心部や国内各地の景勝地の写真が載せられている。生徒は、教科書を開くたびにこの写真のなかに写された日本の風景を眼にすることになり、「日本」についての具体的視覚イメージが形成されるので、このページの意味はきわめて大きい。

伝統的建造物の写真には法隆寺、金閣寺、竜安寺、桂離宮、興福寺、仁和寺、厳島神社、姫路城、名古屋城、陽明門といった神社仏閣や城郭が多いが、岐阜県高山地区に見られる合掌造りの農家などの写真を載せたものもある。また法隆寺百済観音像や高松塚古墳壁画のほか、広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像とソウル国立中央博物館蔵の弥勒菩薩半跏思惟像の写真と並べたものがある。これらはかつて朝鮮半島の文化が日本へ伝わったことを写真によって如実に示そうとするものである。なお古代からの日韓関係の経緯については、本文中で単元としてまとめた教科書もあり、これについては後述する。

伝統行事については、祇園祭、神田祭り、仙台七夕祭り、浅草三社祭り、若草山焼きなどの各種の祭りの写真を掲載した教科書が多いが、博英社のもの(b)では七五三、結婚式、葬礼の写真が掲載されており、他社のものと比べてユニークな写真構成となっている。

自然景観の写真としては、富士山、阿蘇山、那智滝、華厳滝が多く教科書に掲載されている。このうち阿蘇山は大きく噴煙を吹き上げる写真で



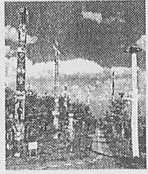
▲ 鎌倉の「翠嵐」(1944年) 桂木洋行 発行



▲ 法隆寺の「阿彌陀如来坐像」(672年) 東京府立総合教育センター 発行



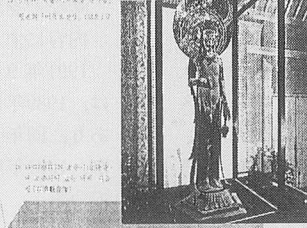
▼ 飯田史也の「富士山」(1954年)



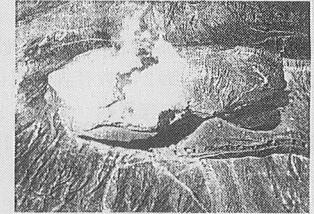
▲ 鎌倉の「翠嵐」(1944年) 桂木洋行 発行



▲ 秋田の「秋田」



▲ 法隆寺の「阿彌陀如来坐像」(672年) 東京府立総合教育センター 発行



▲ 飯田史也の「新羅山」(1954年)

教科書 a. 『高等学校日本語』金星教科書

教科書 c. 『高等学校日本語』宝真堂

教科書 b. 『高等学校日本語』志学社

教科書 d. 『高等学校日本語』博英社



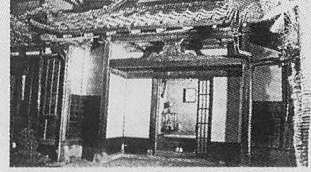
7歳と4歳の女の子、男の子は3歳、5歳、男の子は1歳7歳が、同じ11月15日に生まれた。



伝統的儀式の撮影・新緑



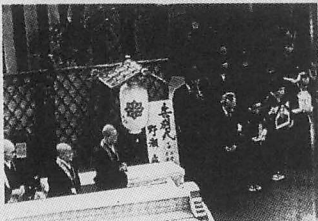
中野区 新緑祭の準備中



▲ 飯田史也の「新羅山」

教科書 d. 『高等学校日本語』金星教科書

教科書 e. 『高等学校日本語』志学社



▲ 秋田の「秋田」



新羅山(1954年)の撮影現場



▲ 飯田史也の「新羅山」

▲ 秋田の「秋田」

〈写真2〉教科書に載せられた写真

ある。韓国には活火山がないので、活発な火山活動をこなう日本の火山の写真は、韓国の生徒たちの印象に残るものと考えられる。だが日本の活火山の写真が、いずれの教科書においても阿蘇山であるのは興味深い。

東京都心部の写真は、国会議事堂、日比谷公園、銀座、新宿高層ビル群、東京タワーなどのものであるが、写真の中に写っている人々の風俗や乗用車の年代などから、いずれの写真も1970年代の終わりから1980年代初頭にかけてのものと推測される。

日本人の生活習慣や風俗を写したのものには、花見、茶会、茶摘、田植え、懐石料理、ひな人形、こいのぼり、きりたんぼを囲む一家団欒の風景、後楽園球場におけるプロ野球の試合の写真などがある。しかしこれらの写真も、人々の風俗から1970年代の終わりから1980年代初頭にかけてのものと推測される。韓国の教科書改訂は5年ごとであり、推定される写真の年代から少なくとも2回の改訂を経ているにもかかわらず、古い写真が使われているのは残念である。しかしソウルなどの大都市では、例えば中区明洞地区の外国書籍店街などで日本の定期刊行雑誌等が販売されている⁶⁾。韓国の現役の大学生達の話によると、日本に関心を持つ若い世代は、そうした雑誌から日本の生活や風俗に関する現在の一般的な情報を得ており、教科書の古い写真についてはあくまで「学校知識的」なものであると割り切っているという。

また金星社のもの(e)には日光のトーテムパークが載っているが、この教科書のなかではそれに関連する本文はまったくない。日光トーテムパークは、日光市内所野公園に1968年に開設されたもので、カナダ風のトーテムポールなどを中心として50本のトーテムポールが設置されている⁷⁾。だが、一般的には日本国内でもこの公園の知名度は低い。なぜ韓国の教科書にこの公園の写真が載せられているのか不明である。古来韓国では、街道から村(洞)にはいる入り口に、「チャンスン」(尙舍)と呼ばれる二対の魔よけの守護神が建てられていた。「チャンスン」はハンノキやクリの木の根を掘りだして作ってものだが、天下大將軍、地下女將軍と書かれたこの二対の守護神は一種のトーテムポールとも考えられる。日光のトーテムパークの写真は韓国の高校生に「チャンスン」を連想させるものなのかもしれない。

後述するように、教科書の本文の中には日韓の高校生が交流する場面を想定しているものが多いが、慶州市の史蹟や、ソウルのオリンピックスタ

ジアムを見学する日本の修学旅行生の姿を載せた教科書もある。

韓国の教科書のグラビアに現れた日本像からは、韓国人が日本の何を「日本的なもの」と考えるのかが理解される。そしてその日本像は、日本人自身が一般的に「日本的なもの」と考える日本像とは異なったものであるという印象を受ける。換言すれば、日本人自身が著した多くの日本紹介書籍の中に載せられている日本の写真と、これら教科書に載せられている写真とは、かなりのずれが生じている。例えば「日本家屋の玄関」という題名で載せられている写真は、武家屋敷風の木造建築による玄関であり、伝統的な建築様式の色合いがきわめて強いという点で、日本人自身にとっても特別な家屋の一例である。また写真に写っている日本人も、祭りや伝統的行事の場におけるものが多いため、多くの人が和服を着用しており、一般的日本人にとっての非日常的場面における人たちである。つまり韓国の教科書のグラビアの写真では、現代の日本のなかでも比較的传统色の強い事物の写真が掲載され、現代の一般的な日本人の、日常生活や事物の紹介が欠落する傾向が見られるのである。それは今回調査したすべての教科書に共通に見られる特徴であった。これは韓国と日本の文化が比較類似した背景のもとにあるために、教科書の限られたグラビアページの中で「日本」を示そうとすると、韓国の伝統文化との差異を際立たせなければならなくなり、より伝統的な和風事物を強調してしまう結果になるためと考えられる。

Ⅲ. 日本語教科書における各単元の検証

どの社の日本語教科書も「上」「下」2冊に分かれているが、「上」の教科書ではいずれも基礎的な基本構文が中心であり、日本についての文章が本格的に単元化されているのは「下」の教科書からである。その内容は大きく、(1)日本文化や日本社会について述べたもの(2)日本語の機能や構造について述べたもの(3)日韓関係について述べたもの(4)教材の文章そのものを日本の文学作品などから引用したもの(5)日本語での手紙の書き方について解説したもの(6)日本の格言などについて述べたもの(7)韓国の文化や社会について解説したもの(8)両国の高校生の交流や生活などについて述べたもの(9)いずれにもとくに関係のないもの9種類に分類される。このように多くの単元がなんらかの形で日本に関連した内容となっている。

なお進明出版社のもの(f)は、父の仕事の都合で、

家族と共に韓国で生活している日本人「松田幸子」が、韓国の高校生達と交流しながら、日本の文化や生活習慣などを説明し、また韓国の文化を学んでゆくという設定で全課が統一されている。したがって幸子と韓国の友人たちとの会話の中で、上記の(1)から(9)までの話題が展開されるという、ユニークな内容構成となっている。

それぞれの単元は、あくまで日本語の習得を目的として設定されたものであり、その単元で習得すべき日本語表現や文法事項を練習するのが第一義的な目的である。例えば、日本風土と文化に関する単元「四季のこころ」は、用言の名詞形の習得を目的とする単元であり、本文の後に「美しい」→「美しさ」、「悲しむ」→「悲しみ」といった言いかえを練習するようになっている。しかし各単元は、単なる日本語語学教材としてだけではなく、いわゆる日本事情教材としての意味も大きい。

本稿では、上記9種類の単元のうち、韓国の日本観・日本人観がよく現れていると考えられる(1)、(2)、(3)、(4)、(8)と、外国語の教科書としては若干異色の(7)について分析を試みる。

1. 日本文化や日本社会についての単元

日本文化や日本社会については、以下のような単元名で掲載されている。

教科書	単元名	内 容
a	「四季のこころ」 「鍵のかからない部屋」 「いろいろの行事」	四季の自然美と文学や美術との関係 障子や襖で仕切られた日本家屋の特徴 正月や子供の節句盆などの年中行事
b	「贈り物」 「所変われば品変わる」 「大都市の悩み」	日本の贈答習慣 生活習慣・儀礼の東西比較 住宅・交通・ゴミなどの東京の都市問題
c	「趣味」 「日本の風土」	趣味の日韓比較と華道・茶道 日本の風土と自然景観

d	「原料がたくさんあればいいんですが」 「もしもし、佐藤さんのお宅ですか」 「お月見」	日本の加工貿易 歌舞伎見学 月と日本文化
e	「日本の住まいと気候」 「日本の宗教」	日本の気候と住居の建築特性 日本人の宗教観
f	「ハチ公」 「桜と日本人」	渋谷駅前ハチ公像のいわれ 桜と日本人の心情特性

この日本文化や日本社会についての単元は、先に述べた韓国の第二外国語教科書の執筆指針③をふまえたものである。これらの単元のうち、「四季のこころ」は岡田章雄「日本人の心」を、「お月見」は国際学会「日本語読本Ⅱ」を、「所変われば品変わる」は今道友信「新しい知性と徳を求めて」を、「大都市の悩み」は「日本情報シリーズ—東京—」をそれぞれ出典としており、各教科書オリジナルの文章ではない。

現在の日本語は、これを使用する民族と国家と言語の名がほぼ一致している。⁸⁾つまり日本語圏と日本文化圏はほぼ一致している。したがって日本文化や日本事情の地域圏は、第一言語として日本語が使用される地域の範囲をはみ出さない。韓国の高等学校で他の言語と比較した場合、日本語は日本文化や日本事情に乗せて教授しやすい言語なのである。韓国の生徒たちは日本事情を学習してゆく中で、日本語の運用能力を高めてゆくことになる。

2. 日本語の機能や構造についての単元

日本語そのものについては、以下のような単元で解説・説明されている。

教科書	単元名	内容
a	「正しい書き方」 「敬語のはたらき」 「慣用句」	送り仮名に関する説明 日本語の待遇表現 身体部分による慣用句
b	「文章」	日本語の文章の書き出し 『雪国』を例に
c	「敬語の使い方」 「生活の中の慣用語」 「日本の文字」	日本語の待遇表現 身体部分による慣用語 漢字、ひらがな、かたかな の歴史的成立由来
e	「日本語」 「辞書を上手に引くには」	日本語の上達の方法 日本語辞書の引き方
f	「急な別れ」	外国語・日本語を学ぶことの意義

その他の単元の場合には、例えばそれが日本文化を説明する文章であっても、その単元の目的は接続助詞の習得であったりするが、日本語の機能や構造についての単元のうち、敬語と慣用句についての単元では、そこで説明されている内容自体が、その単元学習目標となっているのが特徴である。例えば「敬語のはたらき」という単元は日本語の待遇表現に関する内容であるが、本文に付随する語句の説明や練習問題なども、すべて待遇表現に関するものである。慣用語や文字については、1つの単元での教授で充分である。しかし日本語の待遇表現に関しては、教科書の一つの単元だけで習得するのは困難であると思われる。各高等学校の日本語教師の十全な補足指導が必要とされる単元であるといえよう。

上記各単元のうち最もユニークなのは、「急な別れ」である。重要な問題がいくつか展開されている会話なので、以下に引用してみよう。

秀 哲：でも、日本語の勉強は、すればするほど、

難しくなりますね。

幸 子：韓国語も同じですよ。日本人には、特に発音が難しいんです。でも、文法が似ているから、英語より少し易しいかもしれませんね。

金敏基：似ているものを勉強すると、おもしろいでしょう？

幸 子：そうですね。韓国語を勉強してから、日本語がおもしろくなりました。

金教勲：ほくも、それを感じました。英語は文法も発音もぜんぜん違うから、あまり感じませんでしたけれど、日本語は似ているところも多いので、勉強しているときに韓国語との違いが気になりました。

幸 子：それで、韓国語の特徴が分かるようになるんでしょう？

金教勲：ええ、そうです。

(中略)

金教勲：(前略)実は、ほく、高校では英語だけで充分だと思っていたんですが、ほかの言葉を勉強するって、すばらしい意味があったんですね。

金敏基：ほかの世界のことをよく勉強すれば、自分だけが正しいのではない、ということも分かるんですね。それに、外国語を学ぶことがほかの勉強の基礎になる、ということも大切なことですね

幸 子：日本人も、もっと韓国語を勉強すると思います。残念です。

李昌浩：韓国にも、英語さえ勉強すれば、十分だと考える人がたくさんいますよ。

秀 美：幸子さん。わたしも、一生けんめい日本語を勉強します。

幸 子：がんばってくださいね。

(下線・括弧内引用者 以下同じ)

日本語が、他の外国語よりも母国語に似ているために、日本語の学習が逆に母語の再認識に役立つという言及は重要である。日本でも、外国語を学習する目的の一つとして、日本語を再認識できることを挙げることがある。本単元では、近接する言語どうしてあればこそ、相手言語を学習することで母語の特徴がより明確になるのだとの見解にたち、第一外国語の英語の次に日本語を学ぶことの重要性を説いている。一方、現在の日本では、高校生はもとより大学生以上の者でも、朝鮮半島の言語を学習する人口は非常に少ない。このため「近接した言語を学ぶことで、改めて母語を認識する」という機会はありません。また日本のその

ような状況に対して、多くの知日韓国人・朝鮮人の間からも残念だという声を聞く。本单元では幸子に、「日本人も、もっと韓国語を勉強すると思います。残念です。」と述べさせてこのことを指摘している。またここでは韓国人ではなく日本人である幸子が「残念です。」と言い、それを受けて李昌浩がすぐに「韓国人でも英語だけで十分と考える者が多い」と述べて、話のバランスをとっている。日韓の登場人物がそれぞれの立場でどのような台詞を述べるかということに、きめ細かい配慮がなされているといえよう。

上記の会話は、やがて文化の相互理解という内容に発展する。

秀 姫：文化についても同じことが言えますね。

韓国の文化をヨーロッパの文化と比べても、なにが韓国的なのか、実は、あまりよく分からないんです。

金敏基：「韓国的」と「アジア的」の区別が、はっきりしないんですね

李昌浩：おもしろいですね。ぼくは、経済についての日本の本を読むために、日本語を勉強していたんですけど、もっと大切なことがあったんですね。

(中略)

秀 姫：韓国と日本。こんなに近くて、よく似ているのに、よく見るとずいぶん違うんですね。日本に行ってから、韓国について新しい発見がたくさんありました。

幸 子：わたしも韓国にきて、皆さんと話したり、韓国語を勉強したり旅行したりして、いろいろなことを感じました。韓国を知れば知るほど、日本のことが分かるようになるんです。

金夫人：それは、すばらしいことですね。

ここに展開されているのは、自国の文化の再認識という問題である。とくに韓国の文化をヨーロッパの文化と比べた場合に、韓国文化の独自性が分からないという指摘、あるいは「韓国的」と「アジア的」の区別がはっきりしないという指摘には、異文化間葛藤の問題として、韓国の高校生達の素直な思いが示されており、興味深い。ここでは同じアジアの日本語や日本文化を学ぶことによってこそ、韓国文化の独自性を確認できているのである。

韓国では、36年間にわたる日本の植民地支配の記憶から、また当時強制的に日本語を習得させられ、また朝鮮語を抑圧された歴史から、日本語に対する国民感情は一般的に厳しい。韓国では1970

年代初頭から、国民運動として「国語淳化運動」が推進され、植民地時代に定着した日本語日常語を、韓国の固有語に置き換えようとする営みが展開された。また、韓国放送公社（KBS）および文化放送局（MBC）では、局内に「審議室」を設置し、放送業務における外国語の使用を自主規制している。この自主規制は、たんに日本語だけを対象とするものではなく、他の外国語であっても固有名詞以外ではできるだけ韓国固有語に置き換えようとするものであるが、日本語が電波に乗った場合には、抗議の電話がかかるなど視聴者の反応が敏感であるため、放送現場における日本語の使用にはとくに神経を使っているという⁹⁾。

だが今回調査した6種の教科書では、そのいずれもが、植民地時代の韓国と日本語との歴史的關係には論及せず、韓日文化交流の推進や経済協力の緊密化、あるいは異文化理解の足掛かりとしての意義を、日本語学習に見い出そうとしていた。日本の植民地時代の史実に関する学習は歴史など他の教科に委ね、「日本語」教科では外国語学習の意義のみを押し出しているのである。

先述のように、韓国の高等学校の第二外国語課程に日本語が加わったのは1973年であった。今回の改訂教科書を使用する高校生は、1973年以降の生まれであり、彼らの生まれたときには韓国の高等学校ですでに第二外国語としての日本語が教授されていた。朝鮮日報文化部長呉重錫氏は、韓国の若い世代の日本観を次のように分析する。

日本文化に対しては根強い被害者意識を振り落とさないうまま、アメリカの文化を批判なしに取り入れてきた韓国人の間にアメリカの文化への抵抗感が起りはじめて、私達と風習と習慣が似て考え方の似た日本文化に対する関心が再び起りはじめたのは、当たり前のことだったといえるかもしれない。

なお、日帝時代に教育を受けたりその不幸な時代を経験した世代が退いて、戦後世代が社会階層のほとんどを占めるようになったという現実から、日本文化に対する新たな視点が芽生えるのは当たり前のことだと見られる。日本の学問と技術、文化を新たに取り入れようとする若い世代は既成世代の日本文化排撃論理を「被害妄想的」であったり小児病的であったという考えで一蹴する。

過去の不幸だった歴史は忘れることなく、日本人から学ぶことがあれば徹底的に学んで自分のものにする」と主張している。¹⁰⁾

呉氏によると、こうした若い世代の現実的な行

動が、日本語を学習することであり、さらにはその次の段階として、日本に留学することであるという。

3. 日韓関係についての単元

日韓関係について取り上げた単元には、以下のようなものがある。

教科書	単元名	内 容
a	「となりの国」 「ホームステイ」	古代からの韓日関係 修学旅行生山田の韓国家庭へのホームステイ
c	「韓国の文化」 「壬辰の倭乱と李舜臣將軍」	韓国の仏教文化と陶芸の日本への影響 李舜臣の戦功
e	「百済と古代日本」	百済文化の飛鳥文化への影響
f	「もうすぐ春」 「独立記念館」	安重根記念館の見学 独立記念館の見学

「となりの国」、「韓国の文化」、「百済と古代日本」に述べられている内容は、王仁による4世紀の儒教の日本伝来、6世紀半ばの仏教文化の日本伝来、銅製や鉄製の道具類あるいは、建築・土木技術の日本伝来、さらには16世紀の豊臣秀吉の朝鮮半島侵攻時における、陶工の強制連行による陶芸技術の移入などである。このうち「となりの国」では、「日本の文化は、主に昔の韓民族がもたらした文化をもとにして発展してきました。」と述べると同時に、「それが、近代になっては、ぎやくに日本にとり入れられた西洋の文化が、おおく韓半島へ流れこむようになりました。」と述べ、古代の朝鮮半島からの文化移入だけではなく、日韓の相互的な文化交流への言及を行なっている。また「百済と古代日本」では、一人の韓国人高校生が、韓国の大学で古代史を学んでいる日本人留学生から、古代以来、朝鮮半島の文化が日本に伝えられ、日本の飛鳥文化成立の基礎となったことなどについて、簡単なレクチャーを受ける設定になっている。ここで高校生が説明を受けるのは韓国人ではなく日本人留学生からである。韓国の大学で学んだ古代史の知識で高校生にレクチャーするのであれば、それは必ずしも日本人である必要

はない。しかしこのような内容であればこそ、会話の相手が日本人だということで、話しの客観性が高まる。朝鮮半島から日本へという古代文化影響関係を、韓国人が説明したのでは、韓国人だけの独善的な会話になってしまうという配慮があるのかもしれない。またここでは、韓国の高校生に対して歴史を誠実に伝えようとする、この日本人の誠意が示されているように感じられる。この教科書では、日本人像に対するかなりの配慮が見られるといえよう。

「壬辰の倭乱と李舜臣將軍」は、豊臣秀吉の朝鮮半島侵攻軍と戦い、これを撃破した李舜臣の戦績を記述したものである。韓国では、李舜臣はほとんど知らない者はいない歴史上の英雄であり、高校生たちがこの教材でもって初めてその戦績を知るといえるようなことはない。この教材には、自国の歴史や英雄について外国語で説明できるようになるという目的もあるようである。

次に「もうすぐ春」と「独立記念館」ではそれぞれ次のような会話が展開する。なおここに出てくる日本人松田とは幸子の父である。

「もうすぐ春」

(前略)

秀 姫：ところで、幸子さん。あそこに見える安重根記念館に入ったことがありますか。

幸 子：いいえ。入ってみましょう。

* * * * *

(記念館から出て来て)

幸 子：わたし、ショックでした……。

金教勲：歴史的な事実も大切ですけど、もっと大切なのは、これからわたしたちがどんな歴史を作るか、ということでしょう？

李昌浩：ええ、そうですね。幸子さん少し歩きましょう

(後略)

「独立記念館」

(独立記念館で)

(前略)

秀 姫：そうですね。韓国の歴史に関係のある物が、たくさん展示されています。日本からの独立運動の記録など、いろいろな資料がたくさんあります。

松 田：そうですね。日本が韓国を力で支配したということは、本当に残念なことですね。

幸 子：日本人は、韓国でずいぶんひどいことをしたんでしょう。

秀 哲：ええ。歴史の時間に習いました。もちろん歴史的な事実は消えませんが、本当に

大切なのはこれからです。昔のいやなことばかり考えて、新しい友情を作ることができないのは、もっと残念なことです。

秀 姫：幸子さん。今はこうして一緒に旅行したりできるんですね。

松 田：いい時代になりましたね。

ソウル近郊では、この2つの記念館の他、1919年3月1日に抗日決起集会が行なわれた中区鍾路のパコダ公園(뽕고다공원)が、過去の歴史をふまえながら日韓関係を考察してゆく上では重要な拠点であるといえる。この単元でも安重根記念館と独立記念館とに会話の場面が設定されている。

安重根義士記念館(안중근의사기념관)は、1970年に市民の募金によって建てられたものであり、ソウル市中区の南山の麓に位置する。民族独立運動を推進し、1909年に伊藤博文を暗殺した安重根についての書、写真、法廷記録などの資料が展示されている。また独立記念館(독립기념관)は、韓国の国難克服、国家発展に関する資料を収集展示したもので、1987年に開館した。「独立」とは36年間にわたる日本の植民地支配からの独立を意味し、主として日本の侵略とそれに対する抵抗の歴史に関する資料が展示してある。館内には日本軍による韓国人の虐殺・拷問の様子も再現展示されており、日本がかつて朝鮮半島において行った侵略行為の一端を知ることができる。

単元「もうすぐ春」での幸子たち一行は、安重根記念館の中に入っており、見学後には幸子が「わたし、ショックでした」と、その感想を述べている。しかし単元「独立記念館」のほうでは入館する前の会話しかなく、幸子と幸子の父松田の感想は述べられていない。実際に日本人が二つの記念館を見学した場合には、独立記念館でのショックのほうが大きいのと思われる。本単元では、独立記念館を見学した幸子たち父娘の生々しい感想の表明はさり気なくオミットし、そのかわり韓国の若い世代が、自ら作り出そうとしている、新しい韓日関係観を示しているといえよう。

4. 教材の文章そのものを日本の文学作品などから引用したもの

日本の文学作品、あるいは日本人のオリジナル作品からの引用には、次のようなものがある。

教科書	単元名	出典
a	「短歌」 「忘れもの」 「雁」 「一個の人間」	俵 万智『サラダ記念日』 高田敏子『月曜日の詩集』 千家元麿 武者小路実篤
b	「つまづいたおかげで」 「昔話」(浦島太郎)	相田みつを 御伽草紙
c	「日本のむかしばなし」 (すずめのひょうたん) 「一個の人間」	武者小路実篤
d	「雨ニモ負ケズ」	宮沢賢治
e	「夕焼けの雲の下に」 「ごんぎつね」 「笑い話」	百田宗治 新美南吉 『宇治拾遺物語』ほか
f	「かぐや姫」	『竹取物語』

上記のうち「昔話」、「日本のむかしばなし」、「ごんぎつね」、「笑い話」、「かぐや姫」は原文ではなく、簡易な日本語に置き換えてある。そのほかのものは、いずれも原文である。

これらの単元では詩の引用が多いのが特色である。このうち定型詩の引用は『サラダ記念日』からの次の4首である。

- ①「寒いね」と話しかければ
「寒いね」と
答える人のいるあたたかさ。
- ②やさしさをうまく表現
できぬこと
許されており父の世代は。
- ③まだなにも書かれていない
予定表。
なんでも書ける。これから書ける。

④通るたび「本日限り」の

バーゲンを
している店の赤いブラウス。

俵の短歌が採用された理由としては、口語文体によるものであり、初めて日本の短歌に接する高校生にも理解しやすいことや、現代の若い世代の感性で日常生活の機微を歌ったものであり、高校生たちの共感を得やすいことがあげられよう。このうち②の作品は、父の世代のメンタリティーを、一つ高い視点から暖かくとらえ直そうとする、若い世代の気持ちを歌ったものであるが、世代間ギャップの存在は、日韓共通のものであるということがわかって興味深い。

5. 韓国の文化や社会について解説した単元

各教科書には、日本について記述したものだけでなく、韓国についての単元も多い。例えば以下のようなものである。

教科書	単元名	内 容
a	「平和のオリンピック」	オリンピックの歴史とソウルオリンピック
b	「われわれはついに成しとげた」	ソウルオリンピック
c	「韓国経済のビジョン」 「ソウルオリンピック」	韓国経済発展の経緯 ソウルオリンピック
f	「韓国の経済」	韓国経済の現状

これらの単元は、いわば「韓国」を外国語によって自信をもって説明できるようにするための単元といえよう。

5つの単元のうち3つが、1988年のソウルオリンピックに関するものである。いずれの単元も、

わたくしたちは、平和統一への願いをこめて、ソウルオリンピックをりっぱな大会にするためになみだぐましい努力をした。その結果、ソウル大会はこれまでにないすぐれた大会となった。ソウルの名は世界のすみずみまで知られると同時に我が民族が長い伝統を持つ、すぐれた文化民族であることも広く知られることになった。(「平和のオリンピック」)

とにかくソウル五輪は、人種とイデオロギーの壁を乗り越えてりっぱに成しとげられた世紀の祭典として高く評価され、世界の国々が惜みない賛辞を贈ってくれた。

わたしたちは、ソウルオリンピックで発揮した愛国心と国民の底力をさらに生かして先進国の国造りに取り組んでいきたいものである。

(「われわれはついに成しとげた」)

また、このソウルオリンピック大会は、我が国の体育史上にも新しい時代を開くきっかけとなった。それは「なせば成る」という韓国民の強い意志が「金12、銀10、銅11」のメダルを勝ち得て、総合成績第四位をしめた結果にもっともよく現れているのである。

我々は、ソウルオリンピック大会をふみ台として、政治・経済・教育・芸術・体育などを世界的に発展させ、国力をよりいっそう伸ばしていかなければならない。(「ソウルオリンピック」)

と、オリンピックの成功を誇りとし、また今後の韓国発展に努力を惜しまないという、決意の表明がなされている。

6. 両国の高校生の交流や生活についての単元

教科書	単元名	内 容
a	「世界は一つ」	修学旅行で韓国を訪れた日本人高校生の作文
f	「高校生の悩み」	日韓高校生の悩みに関する調査

「世界は一つ」は、日本語教材として書き下ろされたものではなく、修学旅行で韓国を訪れ、韓国の高校生たちと交流をもった、淑徳与野高等学校生8人の実際の感想文からの引用である。高校生の文章は素朴であり、表現も若干幼いが、それだけにむしろ普通の高校生たちの、素直な韓国観が表れているといえる。韓国のことをどれだけよく理解したかということが、作文ではうまく表現しきれていないのだが、文章の節々には感じ取ることができるのである。しかし、韓国の高校生にとってはこれらの感想文は外国語であり、日本の高校生の誠実な気持ちを、行間からうまく汲み取ることができるかどうかは疑わしい。

日韓の高校生たちにとって最も関心が高いのは、相手国における自分と同世代の人たちが、毎

日どのような生活を送っているのか、また毎日どのようなことを考えているのかといったことであろう。単元「高校生の悩み」は、日本の高校生の悩みを調査した資料を見ながら、登場人物たちがお互いの悩みについて会話を交わす設定になっている。韓国の高校生たちは、日本の高校生たちが自分と同じような悩みを持っていることをこの教材から知り、自身と等身大の日本の高校生像が見えてくるものと思われる。

Ⅳ. 結語

以上に見てきたように、日本語教科書の中での日本像・日本人像は、きわめて友好的に描かれたものであった。会話練習の場を、安重根義士記念館、独立記念館などの、日韓関係を語る上では避けて通れず、また日本人が、過去の歴史を反省しなければならぬ場所に設定しても、そこで交わされているのは「過去にこだわるのではなく、過去をふまえて新しい韓日関係を構築してゆこう」という韓国の若者の提案であった。

先述のように、1988年には943,928人の高校生たちが日本語を履修していた。彼らが物心ついた頃には、日本語はすでに韓国の高等学校で教えられていた。また彼らの父母の多くも、もはや日本による植民地支配時代を経験していない世代である。たしかに韓国にとっての日本は、物理的距離の最も近い外国である。また韓日間の経済交流・文化交流は年々盛んになり、物的・人的交流も増大している。こうした現状を背景に、韓国で日本語を習得する重要性が高まっているのも事実である。しかし韓国の高校生たちには、高校入学後、日本語を履修しようと決めるときに迷いは無かったであろうか。韓国の高校生たちの多くが日本語を履修しているからといって、彼らが日本へのこだわりを捨てていると考えるのは早計といえよう。先述の呉重錫氏は、韓国社会の日本語観を次のように総括する。

経済発展と文化交流のため日々に進んでいる情報を得るためにも日本語を習い使いながら、日本語が日常語として使われTVや新聞に登場することに不愉快にならざるを得ない韓国人の心情は、日本の立場から見ると二律背反の自己矛盾として映るかもしれない。

しかし日本語についての韓国人の心の奥にあるしこりが完全に消えるその日までは、韓国人にとって日本語は一つ的手段にすぎないのである。¹²⁾

日本語を履修する韓国の高校生の心情のなかに

も、このような思いが存在し得ることを忘れてはならない。

日本語教科書には、古代以来の日韓関係の歴史に関する単元が多く含まれていた。しかし植民地支配時代の内容も含めて、これらの内容は韓国の高校生にとっては、日本語教科書で改めて復習する必要などない常識である。一方で日本の同じ世代は、どれだけの歴史認識を持っているだろうか。

韓国の高校生、秀哲と教勲とが、日韓関係に関する単元のところで述べた「もちろん歴史的な事実は消えませんが、本当に大切なのはこれからです。昔のいやなことばかり考えて、新しい友情を作ることができないのは、もっと残念なことです。」「歴史的な事実も大切ですけれど、もっと大切なのは、これからわたしたちがどんな歴史を作るか、ということでしょうか?」ということばは、日本人が過去の歴史を忘れてよいという意味では決してない。また、韓国だけでなく日本人の若い世代にも、今後の友好関係を推進してゆこうという意志がなければ意味をなさないことばである。だが残念なことに、日本の現在の高校生・大学生で、韓国の若者からのこうした呼び掛けに応えられるだけの知識を有する者はきわめて少ないように思われる。日本人の若い世代の、朝鮮半島事情や日韓関係に関しての無知は、韓国の高校生たちのせつかくの思いを裏切ることになる。

一方で、韓国の高校生たちが、1冊の教科書だけで日本社会と日本人の現状を知ることには無理がある。高等学校の日本語教師による適切な補助説明が必要であろう。とくに日本の出版物から、日本に関する視覚的なあるいは現実的な情報を得るチャンスの少ない地方の高等学校においては、日本語教師の役割は大きい。このためにも文部省の教員研修留学生制度などを利用した現職教員の日本への招聘を、今後さらに充実させてゆくことが必要であろう。また、韓国の日本語教科書執筆者、編集者が、日本からの必要な資料を入手しやすくするための、日本からの協力体制の整備・拡充が望まれる。

なお本稿執筆にあたっては、次の方々から教科書収集にご協力いただき、また韓国における日本語教育の現状等についてご教示いただいた。ここにお礼申し上げます。

元文部省教員研修留学生、

崔 仁泓氏、高 順永氏

韓 瑛順氏、朴 貴善氏

姜 在成氏、李 鐘玄氏

現文部省教員研修留学生、高 琮鐸氏、曹 美愛氏

福岡教育大学大学院学生, 白 陽天氏, 李 英植氏

V. 註

- 1) 1990年4月から1991年9月までに、筆者が個別的に質問した127名の日本人大学生、大学院生のうち、韓国の高等学校での日本語教科の存在を知っていたのは、2名であった。
- 2) 朴熙泰「韓国の外国語教育事情」(『日本語教育年鑑1990年版』アルク／凡人社, 1990年), 参看。
- 3) 同上書参看。
- 4) 韓国教育開発院『外国語教育現況報告書』1988年。
- 5) 朴熙泰氏の日本語訳による。
- 6) ここでは一般総合雑誌のほか、女性・男性各ファッション雑誌、芸能雑誌など、かなりの種類の日本の雑誌を入手することができる。
- 7) 日光市市役所施設管理課のお話による。なお日光市は1991年3月をもって、本テーマパークの管理をとりやめている。
- 8) 例外としては、国籍的、民族的に「日本人」であるが、海外で育ったために第一言語が他言語である場合、海外に移民したため民族的には「日本人」であるが国籍は日本ではなく、第一言語が日本語の場合、在日韓国・朝鮮人2世3世などで、国籍的・民族的に日本人でないが、第一言語が日本語の場合、アイヌなどの少数民族で、国籍は日本であるが民族的には日本人ではなく、第一言語が日本語の場合等の事例があげられる。
- 9) 呉重錫「韓国のマスコミにおける日本語」(『日本語教育年鑑1990年版』アルク／凡人社, 1990年), 参看。
- 10) 呉重錫「韓国の海外留学状況」(『日本語教育年鑑1990年版』アルク／凡人社, 1990年), 18頁。
- 11) 日本では一般に、「文禄・慶長の役」と呼んでいるが、韓国では「壬辰の倭乱」と呼ぶ。
- 12) 同上書9), 16頁。